
FalleN GoD

黒星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fallen God

【Z-IPアード】

Z5594Z

【作者名】

黒星

【あらすじ】

創造神「シュペリアンス」が世界を創り出した。

だが、その一つ目の世界は崩壊の危機に陥ったため、新たな「二つ目の世界」を創り出す。

そこで生まれた「神」の称号と、「能力」を持つ者たちの様々な話を俺から始めよつ……

神々の降臨

「はあっ！はあっ！くそ…………！」

一人の青年が、5人の追跡者に追われていた。

ここは、皇神「シユペリアンス」が作りだした2つ目の世界だ。

暗黒の夜の中、ビルが立ち並ぶ街の中を走り抜ける青年。

長い黒髪をなびかせて走る。そして、ついに体力切れがやつてきた。

「はあ、はあ・・・・・・・・」

2～3歩歩いて立ち止り、後ろを振り向く。

そこには黒い服装で黒いシルクハットをかぶる5人の追跡者。

「あんまり公の場でこの能力使いたくねえんだけどな・・・・・・」

彼は左手の手のひらを上に向ける。

すると、そこには小さな枯れ葉なら軽く巻き込まれそうな、小さい
が強力に見える竜巻^{ナチュラルボイント}が現れた。

彼は、属に言う自然能力者^{ニアロマスター}の、空力神^{エアロマスター}だ。

「これでも喰らえッ！」

助走をつけ、その竜巻を追跡者に向けて解き放つ。

それは青年から離れ、追跡者に向かう途中にだんだんと大きくなり、
並みの身長の人間の2倍ほどの大きさになつた。

青年は「公の場」のため「神の息吹」を最小限に抑え、かつ、や
つら追跡者にダメージを与えることができる力で抑え解き放つたた
め、竜巻にそれほどの威力はないが、本気でやればまだ大きくなる。

その竜巻によって、比較的大柄な追跡者の体が飛び上がる。

そして勢いよく地面にたたきつけられた追跡者の体が、再び起き上
がることはなかつた。

彼の名前は蒼空^{アスカ}という

「ちつ、またやっちまつたよ・・・・・・・・」

彼らは 神 だ。だが、それは一つ前の世界でのこと。

今は墮神と言われ、世界で追われる身である。

だが、彼らもつかまつて殺されるわけにはいかない。それなりの対抗策もある。

それが「神の息吹」だ。

蒼空の空力神エアロマスターも、その一種。

こうやって、見つかって逃げ切れなければ追跡者を殺すしかないのだ。

だが、ソロで生きていくのが難しい神もいる。

「もうそろそろ、帝に戻った方がいいかな…………？」

帝は墮神となつたものが今は数名あつまつた地下の落合場所だ。

蒼空はそこに住んでいる。

「はあ、また追跡者に追われて5人も殺しちやつたよ。」

そう言いながら蒼空は地下のドアを開ける。

その先には3人の神がいた。

「また見つかったのかよ……お前今日で何回目だ？？」

そうからかってきたのは璃尾リョウ。

彼も蒼空と同じ、自然能力者で、豪炎神ハイオニストだ。

「あんたのおかげでここが見つかつたらどうしてくれるのよ~」

そしてそれに付け加え、恐ろしいことを言つたのは美華みか。

物理能力者フィジカルだ。

「……そうだ。」

無口なのは瀬弩ゼド。

彼は、元素能力者で、使用元素はヘリウム。変わつた戦い方をする神だ。

彼が持つ「神淵」という機関銃は、ヘリウム……太陽の力を利 用していくつもの種類のある弾丸を撃ちだす。

「まあ、いいだろ？見つかっていない…………？」

蒼空がみんなに弁解を始めようとすると、地下の帝が揺れる・

・・・・・。

「なんだ！？まさか・・・・・蒼空！！！」

「いや！俺は俺を追いかけた追跡者は殺したはずだ！」

「じゃあ、おそらく別の追跡者ね・・・・」

瀬鷺は黙つて懷から「神淵」を取り出し、戦闘の準備を始める。

「ちっ、もうここにいられねえじゃねえか・・・・」

と、文句を言いながらも璃尾は「豪炎」を放出する。その「豪炎」

は細長い棒のようになつていき、次第に剣の形になつていく。

蒼空もそれを真似してみて、「空力」で作られたチエーンソーのように、刃が少し当たつただけで綺麗に切れてしまつのような印象を与える刀を作り出す。

ド「オオオオオン！ ドアが破壊される音が帝内に響き渡る。

舞い上がる煙の中に2体の追跡者の影が映る。

瀬鷺はその影に向かつて先制弾を放つ。2体の影の頭を狙つて撃つた弾は、舞い上がる煙を払いながら向かつていぐ。

だがそれは命中せず、2体の追跡者はゆっくつといひびりに向かつてくる。

「・・・・・ちっ」

神淵から弾を撃ち続けるが、それは追跡者にはじかれる。

「！」こつら・・・・・・さつきの追跡者より硬いし強い・・・・

？」

蒼空はその空刀を構え、璃尾の方を見る。

璃尾も同様に豪炎刀を構え準備万端だった。

「ああ、俺も何回か追跡者には遭遇したが、瀬鷺の通常弾なら普通に効果はあつたはずだ。」

「ちっ、結局戦つてココから出でいかなければいけないのは確実だな。」

「くるわよ！」「

美華の掛け声により、二人は会話を辞め向かい来る追跡者に立ち向かう。

「はあああああああああ！」

蒼空は両手で握る空刀で追跡者の肩を斬りつけた。

追跡者の着ているアーマーがとても硬く、蒼空は反動がびりびりと体に伝たわり、身震いする。

「硬えー」そつそつぶやいたのと同時に蒼空は後退する。

璃尾と美華が背後に回り込み、璃尾は豪炎刀で腰部分を斬りつけ、美華は脚刀強化をして、刀が刃一辺化で後頭部を蹴る。

美華は腕力強化をして、刃が付いた靴で後頭部を蹴る

れた頭は力なく倒れる。

「追踪者、一体は膝から倒れる。

「！？」

璃尾が名前を呼ばれ後方を向いたのと同時に、追跡者の横殴りが入る。

「璃尾つ！」

美華が璃尾の安否を心配する。

衝撃により煙が巻き上がっている。それがなくなつたとき、追跡者の横殴りを豪炎刀を握り、刀の先を右手で抑え、刀身で受け止めていた。

だが、あんな強力な横殴りを刀身で受け止めるなど、腕や肩にものすごい負担がかかっただろう。

「痛えじやねえかこの野郎！」

腕をはじき返し、豪炎刀で頭部を縦に斬りつける。

それは頭の半分地獄まで深くめり込み
大量の血がそこから噴き出
る。

追跡者2体目は前に倒れる。

今田一回の神の息吹使つちまつたが、少し休まないじ

卷二

「その前に、新しい隠れ場を探さないといけないね・・・」
4人で考えていると、帝に誰か入ってくる足音が聞こえた。

「僕のところに来るかい？」

そこに立っていた男の第一声はこの発言だった。

「いいのか！？ ていうか誰だ・・・・・？」

蒼空が入ってきた男に、空刀を納め問ひ。

「いいならこちらもうれしいんだが、まずお前の名と身分を問おう。」

璃尾も豪炎刀を納め、本当に追跡者が倒れたか見て確認してから男の方を向く。

「おそらくもう大丈夫だろう？」

「俺の名前は武瑠^{たける}、そしてついでに俺も神だ。そして来るなり早めにした方がいい。またここに違う追跡者が来るのも時間の問題だ。」

「あ・・・あ。『イツなら信じても大丈夫そうだな。』」

蒼空は武瑠の見た目と、神という証言を聞き信じることを伝える。「とりあえず今は行くところがないから、かくまつてもうれるなら行こう。」

美華も賛成し、4人は武瑠の隠れ家に向かつて行った。

「ここで休んでいてよ。俺はやることがあるから」

武瑠の隠れ家についた頃には、もう朝日が出ていた。

帝から30分くらい、人目に付かないように歩いて来てやつと着いた。

隠れ家は、町はずれの少し森のよう^に気が生い茂る中のウッドハウスのよう^なところにあった。

素朴な場所で、襲撃にあつたらすぐに壊れてしまいそうな、そんな隠れ家であった。

武瑠はそういうと、早歩きでここを出て行った。

「アイツの能力は何なんだろう？」

「いずれわかるさ。あいつが味方してくれるなら心強いだろう。」

美華が木でできたまたこれも素朴な椅子に座りながら言ひ。

そのころ、武瑠が向かっていた場所は・・・・・・
彼が来ていた場所は「帝」であった。

「あの璃尾つて子もまだまだな・・・・・・。あの追跡者はまだ
生きている・・・・・・」

そう、武瑠が思いながら帝に入ると、追跡者一人がゆっくりとした動作で起き上がる。

「やっぱりね みんな仕留めきれていなかつたようだね」

窓から入る朝日によつて武瑠の影は大きく伸びる。

「影小鎌」
シャドウシックル

武瑠がそうつぶやくと、武瑠の影が宙に舞つてその形を小型の鎌に変える。

影でできた一つの影小鎌を両手でつかみ、追跡者に向かい走りだす。

「安らかに眠れ・・・・・・」

2体の追跡者ver.2の間を高速で走り抜ける。正確にいえば、2体の追跡者を上半身と下半身に斬り分け、高速でその間を駆け抜ける。

一つに分かれた体はゆっくりと横にずれいき、地面に4つの半身が転がる。そしてその体の斬れ目からは血があふれるばかりに流れ出る。

「血の匂いは嫌だな・・・・・・」

影小鎌を解き、武瑠は帝から出て行つた。

「ああ～～～、腹減つた～」

4人がここ、武瑠の隠れ家に来て4時間が経過する。

帝で追跡者ver.2との戦闘以来腹が減っていたのを我慢してここまで来ていた。

「たしかに・・・・・・腹減つたかも」

「もう我慢できねえ！何か買いに行こう！」

そういうと、蒼空は立ち上がり財布を手に持ち隠れ家を出る。
それに続き二人も隠れ家を出る。

街の商店街についた4人は目に入る食べ物で好きな物を買い、満足そうに頬張っていた。

そんな矢先のことだつた。

4人が腹ごしらえをすませ、適当にぶらぶら歩いてすこし暗くなり始めた頃……

「璃尾、そういうえば……いい！？」

璃尾は蒼空がこちらを向いて変な顔するので、後ろを振り向く。

「追跡者だ、逃げるぞ」

小声で3人に呼び掛ける蒼空。

追跡者に見つかってしまった。8人で行動している。

「あの量はさすがにヤバイって！」

4人は商店街を逃げる。入り組んだここなら何とかまけるかもしない。

「一手に分かれよう！」

蒼空がそう案を出し、一手に分かれた。璃尾と美華、蒼空と瀬鷺の二つに分かれる。

それにともない追跡者も4人ずつわかれること。

璃尾と美華は、追跡者との一定の距離を保ちながら逃げ続けていた。

蒼空と瀬鷺は、じわじわと迫つてくる追跡者に危機を覚え始め、広間に出て戦うことを決める。

「ちつ……やつぱ追跡者足速え……」

肩で息をしながら一人はそう戯言を呴く。

「やるぞ、瀬鷺」

「…………ああ」

蒼空は足と腕に「風」をまとわせ、瀬鷺は「神淵」を懷から取り出す。

「神淵」にセットされている弾丸は「貫通弾」だ。おそらく追跡者がver.1でもver.2でも、これならうちぬけると思ったのだろう。だが、瀬鷺の弾丸はすべて「ヘリウム」によつてできた弾

丸だ。

一発での殺傷能力はない。

「行くぞ！」

蒼空は右の一体、瀬弩は左の2体と戦う。

蒼空は足にまとわせた「風」により移動速度が上昇している。すばやく追跡者の後ろに回り込む。

「これでも喰らえ！！」

腕にまとわせた「風」により、腕をふるうスピード・威力が強化されている。

その右腕から繰り出される打撃は追跡者1体の右腰に命中する。

「硬い！ver·2か！？もう一丁！！」

次に左腕からの打撃を加える。追跡者は両腰を殴りつけられ、力なく腰が曲がる。

瀬弩は、追跡者に先制弾を撃つ。「神淵」から撃ち放たれた「貫通弾」は「通常弾」とちがい、はじかれなかつた。だが、やはりアーマーが硬い。

それから、1発、2発、3発「貫通弾」を撃ち続ける。

追跡者の硬いアーマーに穴が空いていく。

「うあおおおおおおおお！！」

蒼空は最初に攻撃を与えたver·2に追撃を加え続ける。だが、そこにもう一体のver·2の攻撃が入ったため、後退し攻撃をやめる。

「ちひ、ちひぱー体いるとやりずれえ！」

さしあと一体を片付けるため、すこし「神の息吹」を多く消費する。

そして、蒼空は左手をver·2に向ける。

「一体目・・・・・・・・」

ver·2に向けられた左手からは、ver·2に一直線に向か

う竜巻が現れる。威力が半端ではなかつた。

それを受けた巨体のver·2は、最初にいた位置から10mほど遠くに吹っ飛び、首がガクッと崩れ落ちる。

「どうだつ！」

その頃、璃尾と美華はいまだに追跡者との逃亡劇を続けていた。家が立ち並ぶ入り組んだ道を駆け巡る。二人を四人の追跡者で追いつけて10分ほど・・・・

「璃尾！　もうむり！」

美華の体力が限界にきたようだ。

持久走ならまだ長い間走れるだろう。だが、状況が違う。人・・・・・人造人間に追いかけられ、それに捕まらないようなスピードを維持するのは、精神的圧迫感や体力的にも持たなかつた。

「しゃあない！」

璃尾は美華の横に並び豪炎を発炎させる。発炎された炎は璃尾の周りを渦巻き、近付いただけで燃え散ってしまう印象を与えた。

美華はおなじみの刃靴デュアルショースを履いており、脚力強化の能力を使い、攻撃力・移動速度などを上昇させる。見た目は変わらないが、筋肉が活発に動けるようになつてている。

「さてと・・・・準備はいいか？美華？」

「当り前よ」

「よし行くぞ！！！」

先手を取つたのは璃尾。いまだに体の周囲を渦巻く炎はある。それをコントロールし璃尾はver·2にむかつて炎球を飛ばす。1秒に100球は飛んただろう。

空を斬り、飛んでいく炎球は一直線にver·2に向かっていく。炎は、酸素を取り込むことにより大きさ・威力を増す。ver·2に向かうまでの間に取り込んだ酸素によつて、ver·2に直撃するときの炎球の大きさは最初の倍となつていた。

炎球が、ver·2に直撃して周りに爆炎がまき散らされる。そ

の炎は追跡者の鉄・鋼のアーマーをとかす。

だが、すべて溶かしたわけではなく、ほとんどアーマーの意味がないまでに溶かしただけだ。

前方の2体がその状態となつた。

「美華！」

「分かつてゐよ！」

そう璃尾が呼びかけた時には既に美華はその2体のver·2の背後に回り込んでいた。

そして、刃靴で壱撃、弐撃、参撃を加え、1体は倒れた。

だが、美華の後ろには無傷のver·2が太い腕で殴りを入れようとしていた。

「やば！」

美華は咄嗟に背筋の筋力強化をして、ver·2の殴りを受ける。「このつ！」

璃尾は豪炎刀の二刀流で傷がついた方のver·2を斬り、美華を殴った方のver·2に斬撃を加える。

その純炎で作られた剣は切れ味はないものの、その熱量によってただ斬るというより焼き斬るという斬撃だ。

その斬撃は硬いアーマーを焼き、皮膚に到達してその熱により皮膚を溶かして斬り裂く。

2体目のver·2を倒し、二人は後退する。

「神の息吹使いすぎたかなあ・・・・・・」

神の息吹は消費すればなくなつていく。よくある魔法使いの魔力と同じ原理だ。

「後一体、これは・・・・・きついぞ」

璃尾と美華は追跡者を2体倒し、後一体といつところまで行つたが、神の息吹を消費しすぎてしまつた。

「助太刀しようか」

そう声が聞こえた方を振り向くと、武瑠が空を飛んでいた。

背中から黒い羽根のようなものが生えている。それは影の能力によ

つて生み出されたもので、

どこまでも続くような黒い闇のイメージを『』える。

「武瑠！」

「君たち、あまり「神の息吹」を使いすぎない方がいいよ。手遅れになる」

武瑠は一人に注意をしてから、左手を上に擧げる。

「シャドウ闇影の大鎌」

そう言うと、上に向けた手の平に黒い棒のようなものが現れ、それが見る見るうちに長くなり、鎌を備えた大鎌になる。

「あとは僕に任せて休んでいていいよ」

武瑠は「影翼」で浮遊したまま追跡者の背後に回り込む。

そして、その大鎌でver.2の首を斬り裂いた・・・・・。はずだつたが、首は落ちなかつた。

「あれ……？今確かに斬ったのに……」

「うん、確かに斬つたよ。でも斬り落としたら血がたくさん出てグロいでしょ？だから斬つてダメージを与えるんじゃなくて、斬らないでダメージを与えることにしたんだ。」

そう、二人からしてみると意味が分からなくあるようなことを言うと、ver.2の巨体は崩れ落ちる。

「説明はあとで。本物の僕が言つよ」

「本物……？」

武瑠は、もう一体のver.2の首を斬る。だが、またしても首は落ちず、見た目は何も変わらないのにver.2の体は崩れ落ち、その後動くことはなかつた。

「瀬鷺！あと1体だ！」

「ああ……」

蒼空と瀬鷺は3体を倒し、後一体となつていた。

「ちょっと「神の息吹」使いすぎたぞ……いけるか……？」

「君の能力すごいね。さすが神帝の一人……」

最後の方はわざと聞こえないように拍手をしながら後ろから武瑠が来る。

「武瑠……」

「あとは僕に任せてよ。璃尾達の方はもう助けたから安心していいよ」

武瑠はそう言い、両足両腕に影をまとわせる。鋭い……何もかもを突き刺してしまつような、刺されると痛みを感じる前に死してしまつようなイメージが頭をよぎる。

そうして、武瑠はゆっくりとver・2の元へと歩み寄っていく。ver・2もその巨大な体でだんだんと武瑠へと近寄つて行く。そして、大腕を振りおろす。

武瑠は影をまとう右手でその腕を突きぬく。そして、なにか苦いものをかみつぶした時のような顔をして、その腕を引き抜く。

突き刺された腕から血は出ない。ver・2が人造人間だからじゃない。武瑠の影が表面での物理的ダメージを与えていないからだ。

「一人目」

もう一体のver・2は武瑠の横から攻め寄つてくる。だが、まじりぎ一いつせずに左手をver・2に向ける。

そこからは黒いものがいくつか飛んでいく。そしてそれがver・2にあたると、体の中へとめり込んでいく。

そして、次の瞬間……。

ver・2の体は……破裂した。

「ス……スゲヒ……」

「……」

蒼空と瀬弩はあまりのすゞさに瞬きせずに入っていた。

武瑠は体に纏わせた「影」を解き、ゆっくりと一人の元に近付いていく。

「武瑠……お前すじいな」

蒼空は武瑠のあまりの強さに驚きと興奮の感情をありわにしていた。

そして、「俺もそんな力があれば」とつぶやいていた。

「君にあるんだよ。これくらいの力」

武瑠はそつぶやく蒼空にそつ伝える。

蒼空は、なんで? と今にも言いそうな顔で首をかしげる。

「神帝つて知ってるかい?」

武瑠は体に付くホコリをほろいながらそう問う。

「神帝とは、皇神「シユペリアンス」の次に生れた「神」。そして、たくさんの神がいる中で最も多くの能力、

「神の息吹」を使える。神帝は6人しかいないんだ」

そして、「神帝」について話していくうちに璃尾・美華も、もう一人の武瑠と一緒にここまで来た。

「あれ? 武瑠がもう一人……ってあれ? 今俺の隣にいたはずなのに

……

璃尾は一人いたはず、本当は一人いてはいけないのだが、もう一人の武瑠を探す。

「いないよ。それは僕の「影身」……分身のようなものだから」

それを聞くと璃尾は探すのをやめた。

「お前……なんでもできるな」

璃尾は多種多様の武瑠の能力のバリエーションに驚いていた。

「それで……話の続きをだけ」

「あ、もしかして邪魔したのかな?」

璃尾は一步後ろに下がる。

「うん。 そう訪ねて俺に返事をしなきやいけない状態を作ってる時点で邪魔してるよ」

武瑠は璃尾の方を見ず、少し笑っている時の声を出しが、内心怒っているだろ?。

「君なんだよ。君も「神帝」なんだ」

武瑠は、蒼空にそつ告げる。そつ言つと、隠れ家の方向へと歩き始める。

「へつ?俺も?」

蒼空は何も知らないようだ。自分の正体。自分に与えられた称号が「神」ではなく「神帝」だということも。

「ま、まあ速く帰ろうや。つかれた」

そして、追跡者ver.2に追われる一日は終らうとしていた。だがそんな中、一人「死神」になってしまふ者もいた。

神々の降臨（後書き）

こんばんわ、黒星です。

だれか読んでくれて感想もくれる方がいたらとてもうれしいです！

自分の的に結構良い作品になりそうな感じです。

いらっしゃー！そー。ナルシストとか言わない！

んでは「F a l l e N G o D」をよろしくおねがいします！

? - ? 死神

夜の街。ビルが立ち並ぶその街の公園広場。そこは街の中心部から少し外れた隅の方にある公園。

夜にそこに来る人は少ない。その中、一人の神が戦闘を行っていた。

「くそ！ 一体お前は誰なんだ！？ 砂突槍！」
サンドラング

そう言い放つた神は砂を操り、それを槍のような形状にし、もう一人のほうへと向かう。

「そんなもの！」

もう一方は、鉄を自在に操ることができる「鉄武」の能力者。
アイアンクラッシュボン

鉄を盾のように扱い、砂突槍サンドラングを防御する。

「なに！？」

そして鉄武の能力者、通称「リドラ」は盾として使った鉄を、リーチの長い槍に変形させ、その槍でもう一方の男を突き刺す。

男は口から大量の血を吐き、そのまま倒れる。

リドラは懐から、なにか紫に濁った水晶を取り出し、男に近付けた。

すると、紫の気体となつた「神の息吹」が水晶に取り込まれていく。

「後どれくらいかな？そして、『イツも3体目の『死神』になるのか」

死神。それは「神の息吹」^{ダーコオブダック}を使い果たした「神」が陥ってしまう現象。「死神」の能力は「常闇」^{デスマーズ}。そして、その「常闇」の能力は、「死神鎌」^{デスマスサク}を生み出す。

神の息吹を使用せずに使うことができる能力。闇の力。「死神」となった者らは無差別に「神」を攻撃する。

そして、リドラが立ち去るのとした時、「死神」が起動し始める。

「おひと。早めに退散つと」

蒼空たちがver.2に追われた日、「死神」が生まれた日はそうして終わった。

「ああ～。筋肉痛やべ～」

蒼空は隠れ家のベッドに倒れこむ。そう、昨日の追跡者ver.2との逃亡劇と戦闘により、体の複数の場所が筋肉痛なのである。もちろん、「神」も筋肉痛になるものだ。

「お～い。「んな」ともあるつかと良い物買ったんだぞ！」

そう言いながら璃尾は懐からあるものを取り出した。

「肩」じり、打撲、捻挫、筋肉痛等の痛みに。液（フェルビナキュー3・1＆配合）」

「つーか、そんなもん本当に効くのか？」

蒼空がふくらはぎを自分なりにマッサージしながら聞く。

「たぶん……な。うん。まあ付けないよ」マシだろー。」

璃尾はぬるタイプの「やれ」を痛みのあるところに塗る。

「んじゃあ俺も」

蒼空も適量を塗り、外に出る。外は、快晴とまではいかないが晴れていた。

だが、少し寒かつたため、蒼空は温風を周囲にまとい、出歩く。蒼空が出歩いて1～2時間。少し暗くなってきた頃、一つの公園にたどりつく。

ベンチにすわり、温風をまとっていたため、少し暑くなり、少し温風を解ぐ。

その瞬間に冷たい風が吹き、蒼空の体に当たる。

「はあー。涼しい」

そう、平和・穏和な時間を過ごしていた。

「ありやりや。『死神』がこんな」……

そうつぶやいたのは武瑠だった。その周りを三体の「死神」が囲む。

「ハア・・・・せつかくゆっくり休めると思っていたのにな。怒らせたいみたいだね……」

彼は一つの刀「影刀」シャドウブレイドを握る。そして、足首・手首から小さな影の翼が生える。

「やつと終わらせるよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5594z/>

FalleN GoD

2012年1月14日19時45分発行